

日本における批判的国際法学の第一人者に聞く

小栗寛史（岡山大学）

最上敏樹先生の『国際法以後』（以下「本書」という。）がみすず書房より刊行された記念に、著者ご自身から本書誕生の背景を伺うことのできる講演会が2024年6月22日に駒澤大学で開催され、筆者（小栗）は幸いにもパネリストとして参加することができた。本書の主たる批判対象である、国際法学における主流の「法実証主義アプローチ」——実定法の細かい解釈論や緻密な先例分析——に魅力をあまり感じないまま研究者生活を始めてしまった筆者にとって、国際法における行為規範と裁判規範との関係の議論や「国内法モデル」批判など、最上先生の理論研究は常に刺激的であり、それらの業績から多くを学んできた。このような意味でも、本書についてコメントし、先生ご自身からリプライを頂戴できるという今回の企画は願ってもない貴重な機会であった。

国際法理論の中でもその批判的潮流（以下「批判的国際法学」という。）を扱う本書には、その性質故に様々な論点が含まれるが、当日の報告では、最上先生のこれまでの研究との関係に注目し、日本の国際法学界における位置付けを描き出そうと試みた。

欧米においては、コスケニエミ（Martti Koskenniemi）に代表されるように、1980年代以降、国際法専門家の役割や国際法学という知的生産プロセスに着目することで、従来の国際法「学」に対する批判的研究が蓄積されてきており、批判的国際法学は現在に至るまで国際法理論研究の一潮流を成してきた。これに対して、日本においては、コスケニエミの議論を（批判的に）紹介する文献こそあれ、批判的国際法学それ自体に関する業績は（本講演会企画者の一人である根岸陽太先生の業績を除けば）ほぼ皆無である。

以上の背景に照らすならば、最上先生は疑いなく日本における批判的国際法学の第一人者である。実際に、これまでの業績においても、「国際法のパラダイムに対するこだわり」のもとで、「パラダイムの相対化」を目指すという研究目的や、「すべてを所与のものとしてとらえる傾向が根強い国際法学の世界にあって、そうした認識を問い直そうとする態度」として批判的国際法学を採用するという決意が明確に示されてきた（大沼保昭・最上敏樹「国際法学へのいざない」大沼保昭（編）『21世紀の国際法』（日本評論社、2011年））。本書は、日本におけるパイオニアが批判的国際法学を概説し、さらにそれに徹底した批判を加えるものであり、この分野に明るくない専門家にとっても必読の書である。

本講演会の成果の一つは、最上先生が日本においてどのような業績から影響を受けたのかという点を明らかにできたことであろう。上記の対談録における対話相手は大沼保昭先生であったが、欧州中心主義批判によって欧米の学界に少なからぬインパクトを与えた大沼先生もまた、最上先生と同様に批判的国際法学の潮流に位置付けられ、実際にその大沼先生から多くを学んだということを最上先生ご自身から伺うことができたのは幸いであった。改めて、講演会を企画してくださった先生方、他のパネリストの先生方に御礼を申し上げたい。